

家族への想いを込めて、

日本画家 掛川寸麻

毎年4月下旬から5月中旬にかけて白やピンクの美しい花を咲かせる絢爛たる石楠花。高さ2mを超えるほどに育ったこの木も、初めて掛川家にやって来た時は、人差し指ほどの小さな根付きの株に過ぎなかった。今から50年近くも前のことだ。そして、掛川寸麻は、玄関前の庭に咲くあでやかな花を、長年に渡って日本画に描いてきた。

山岳救助隊員や山岳ガイドも務めた彼女の夫は、「山のもので一切採らない」をモットーとする生粋の山男。そんな彼が、ある夏の日、浅間連峰の深山から一株の石楠花をザックに忍ばせてきたのだ。今となっては、その理由はわからない。ただ、山男にとってある意味で背信的な行為だけに、「葛藤の一刻があつたに違いありません」、妻である掛川は推測する。

枯れもせず、伸びる気配もなく、里の土に馴染もうとしていたに違いない石楠花。12年が過ぎた頃から目に見えて成長し、ついに初咲きの花を

美しい石楠花を描く。



一輪咲かせた。夫婦の喜びは大きかったが、その数年後に夫は亡くなってしまふ。まさか自らの運命を十数年前に予測し、ぜいたくをさせてあげられなかった子どもたちへの贈り物にと、禁を破って石楠花を持ち帰った訳でもあるまいが。



深山の贈り物
59.5 x 49.0 cm
墨 顔彩 画仙紙
2013

深山の贈り物 60.6 x 50.0 cm / 顔彩 鳥の子紙 / 2000